

らっきー・らていっしゅ・ほーす

1

「梨花、馬は好きか？」

学校帰り、いつものように上村くんの家に寄ってラッキーとじゃれ合っていると、不意にそんなことを訊かれた。

「そうね、馬刺はけっこう好きかな。牛肉よりもくせがなくて食べやすいよね」

「いや、そうじゃなくて」

机に向かっていた上村くんが身体をずらす。机に置かれていたパソコンのモニターが、私の位置からも見えるようになった。

「こーゆーの、どう思う？」

「……っ！」

思わず、息を呑んだ。

モニターには、大柄な白人女性が前屈みになって木の柵に手をつき、背後から馬にのしかかわれている動画が映し出されていた。

びつくりするくらいに大きな馬の性器が、陰部

に深々と突き刺さっている。興奮した牡馬が身体を揺すって腰を突き出す度に、女性は悲鳴のような喘ぎ声を上げていた。

おそらく、海外のアダルトサイトで見つけた動画なのだろう。

私は声を失って、その光景に見入ってしまった。初めて見た。

牡犬と人間の女性との性行為なら、画像や動画は何度も見たことがあるし、なにより自分自身で経験しているし、その場面上村くんが撮ったビデオで嫌というほど見せられている。

だけど、馬との行為なんて初めて見た。

私は犬好きでラッキーを愛しているのであって、別に獣姦そのものが好きというわけではない。アブノーマルな行為故により興奮していることは事実だけれど、それも愛情があればこそだ。だから、犬以外の動物を相手にした行為には特に興味はない。

そもそも、人間と馬がセックスできるなんて考えもしなかった。なんといつても身体が大きさが

違いすぎる。

ラッキーは犬としては大きい方だけれど、それでも体重は私より少し重い程度。生殖器の大きさも平均的な日本人男性よりは大きいものの、それでもなんとか受け入れられるレベルだ。

だけど、いま見ているものはまったく桁が違う。馬の体重って、競走馬で四百から五百キロくらいだったろうか。私の十倍以上だ。

そして生殖器についていえば、そもそも人間や犬のそれと比べること自体が間違っている。あれと比較対照になるものといえば、人間の腕とか、野球のバットとかだろう。太さは、身体の大きな白人女性ならなんとかかなるかもしれない。しかし長さに至っては、胎内に受け入れられるのは先端のほんの一部分だけだ。

「どうだ？ 観ていて興奮する？」

上村くんが隣に移動してきた。私の身体に腕を回して抱き寄せると、最近伸ばしている髪をかき上げて、うなじや耳にキスをしながら耳元でささやく。

「あーゆーの、やってみたくないか？」

「え？」

「実は、静内しずないで牧場やってる親戚がいるんだよな」

「……上村くん、君ねえ」

私はこれ見よがしに、大きな溜息をついた。

「私のこと、なんだと思ってるの？ 私はラッキーが好きだから、彼と……エッチしてるの。別に、動物ならなんでもOKの淫乱獣姦マニアじゃないのよ？」

「ラッシーやエースとだって、悦んでやってんじゃないん？」

「あ、あれは……」

一瞬、口ごもる。

ラッキーと瓜二つの兄弟たち。兄弟三頭を相手にしての乱交じみた行為は何度か経験しているが、確かに気が遠くなるほどに気持ちがいいものだった。始めるまでは少し抵抗があるものの、一度火がついてしまえば、狂ったように三頭を求め続けちゃう。

「あ、あれは……君が無理やりやらせてることでしょう！ それに、ラッキーやエースはラッキーの兄弟だし、外見も性格もよく似てるし……。とにかく、私は愛のないエッチなんてしたくないの！君、ラッキーと私の飼い主のくせに、浮気を勧めめるわけ？」

「浮気だなんて、そんな大げさな」

背後から抱くような態勢で私の胸を弄びながら、上村くんは笑う。

「俺が梨花の浮気を許すはずがないだろ」

「だったら、何故そんなこと言うの」

「浮気じゃなくて、プレイだよ。ここでの馬は、浮気相手じゃなくて単なる道具。バイブとか、キユウリとかナスとかと一緒に。お前、そーゆーの好きだろ？」

「……それこそ、君が無理やりやってることじゃない」

どちらかといえばクールで硬派な外見とは裏腹に、上村くんはすごくエッチなのだ。いろいろと普通じゃないエッチを私に強要して楽しんでいる。

いま挙げたような、指や性器以外の異物を挿入されたり。

縄で縛られたり、ロウソクを垂らされたり、あそこの毛を剃られたり。

首輪をつけられて、夜の公園を裸で散歩させられたり。

そして、そんな場面をビデオに撮られて、冷静な時に見せられたり。

しかし、私の方にもあまり強く文句を言えない事情がある。

「悦んでるくせに」

上村くんが独り言のようにぼそつと言う。

そう。

問題はそこだ。

強制的にされているはずのアブノーマルな行為なのに、感じてしまうのだ。

正直に白状すると、私はエッチなことが好きだ。高校生といえば誰でもエッチなことに興味のある年頃だけど、多分、平均的な女子高生よりも性的な好奇心は強いのではないだろうか。そして、普

段の生活態度が真面目な反動なのか、あまり普通ではない行為に、より興奮してしまう。

上村くと関係を持つようになって思い知らされたことだけれど、私にはマゾの気があるらしい。普通の女子高生にはとうてい受け入れられないような恥ずかしい行為を強要されることに、昂りを覚えてしまうのだ。

「想像してみると、すげー興奮しない？ 梨花があのでっかいモノをぶち込まれて泣き叫んでいるところ、俺も見たいなあ」

「……そんなの、やだもん」

「とか言つて、興奮してくるくせに」

セーラー服の横のファスナーを上げて、上村くんは手を差し入れてくる。ブラのフロントホックを手早く外し、大きな手で私の胸を直に愛撫してくる。

「や……、だ」

私は身体を振らせて、その手から逃れようとした。けれど、もう手遅れだ。触れた瞬間に気づかれてしまっただろう、先端の突起が固くなっ

ることに。

それは仕方がない。私の視線はパソコンのモニターに釘付けになったままだった。自分でしたいとは思わなくても、変態的な性行為に対する興味は強い私のこと、見るまいと思っても視線がそちらに向いてしまう。

画面では今、結合部がアップになっているところだった。黒い杭のような馬のペニスが女性器を貫き、もう一人の女性が抜けないように手を添えている。

こんなものを見せられて、平常心でいられるわけがない。胸は固く張っているし、ショーツの中は急激に湿度が上昇して、上村くんの指が、ラッキーの舌が触れてくれるのを待ち望んでいた。

「……あ、ん、……くうん」

上村くんは、執拗に胸を揉み続けている。人差し指と中指で乳首を挟んで刺激を加えながら、手のひら全体で乳房をこね回す。

その愛撫はたちまちのうちに、私の性的興奮を臨界点まで引き上げてしまった。下半身に力が入

らなくなつて、頭の中がピザのチーズみたいにとろけてしまう。私は上村くんにもたれかかるようにして、彼が与えてくれる快楽に身を委ねていた。最近、胸がすごく感じるようになってしまっている。

ラッキーや上村くんと関係を持つようになってから半年ちよつと。そのことと関連があるのかどうかは不明だけど、胸の大きさは半年前に比べてずいぶん成長していた。それに比例するように、感度も増しているような気がする。

上村くんに乳房をこね回されること、ラッキーの大きな舌で乳首を舐められること。どちらも、それだけで達してしまいそうなほどに感じてしまふ。

「あつ、……かみ……むら、くう……ん、ああつ！」

不意に、乳首を強く摘まれた。その刺激で、軽い絶頂を向かえてしまう。だけど、それで昂りが治まったりはしない。私のエッチな身体は、むしろここから本格的に燃え上がるのだ。

私は、無意識のうちに脚を拡げていた。その中心にあるものを愛撫して欲しいとねだるように。もう、ショーツには楕円形の染みができているはずだ。

「上村くん……お願い、下も……」

上村くに身体を預け、精いっぱい甘えた声でおねだりする。普段の私からは、自分でも想像できない『女の子らしい』仕草だった。

「触つて欲しい？」

「……うん」

「イキたい？」

「うん……もう、我慢できない……よお」

恥じらいとか慎みなんて言葉、頭の中からすっかり消え去ってしまった。私はもう、上村くんとラッキーが与えてくれる快楽の中毒だった。

「ね、私……もお……」

「ダメ、触つてあげない」

「え？」

意外な台詞に驚いて、後ろを振り返ろうとする。だけど上村くんはしっかりと私を掴まえて、執拗

に胸を攻め続けている。

「一緒に静内に行くって約束したら、いくらでもイカせてやるよ」

「っ！」

その一言で、彼の術中にはまったことを悟った。かなり、まずい状況だった。この半年間の調教で開発された身体は、快感に対する耐性がまったくといっていいほど欠けているのだ。上村くんやラッキーの愛撫を受け始めたが最後、徹底的に絶頂を迎えなければ収まりがつかない。

今も、火照ったヴァギナを触って欲しくて仕方がない。ペニスを挿れて欲しくて仕方がない。もう、我慢できない。

だけど、上村くんは私が望むことをしてくれない。して欲しければ、馬とのセックスを受け入れると言っ。

まずい。本当にまずい。

これ以上焦らされたら、頭がおかしくなってしまう。理性的な判断ができなくなって、馬だろうと牛だろうと、首を縦に振ってしまいそうだ。

だけど、そればかりは受け入れてはいけない提案だった。

「……ラッキー、来て」

私は最愛の恋人(恋犬?)に視線を向けた。上村くんがしてくれないなら、ラッキーにしてもらえばいい。

「……」

「ラッキー、待て」

立ち上がりかけたラッキーは、上村くんの声でその場に伏せてしまった。なんだかんだ言っても彼は犬である。恋人よりも飼い主の命令の方が優先順位は高い。

「……上村くん、いじわる」

「だから、俺の言うことをきけば、うんと気持ちよくしてやるって」

言いながら、一瞬だけショーツの濡れた部分に触れてくる。指先だけの軽い接触なのに、私には高圧電流を流されたような衝撃だった。身体の中から、蜜がとめどもなく溢れてくる。

「ひっ……い、……あ、ああ……」

だらしく開いた唇から、涎が滴る。

「挿れて欲しいか？」

「欲しい……欲しいのぉ……、お願い、お願い……」

「仕方ない、挿れてやるよ。……ただし、こっちなにな」

「……あつ！」

いきなり背中を押されて、前のめりに絨毯の上に突っ伏した。膝をついて、お尻だけを持ち上げたエッチな姿勢にされてしまう。

絞れば蜜が滴りそうなほどに湿ったショーツが引きずり降ろされる。濡れた性器が外気に触れて、ひんやりと冷たく感じた。

「ひあつ？ だめっ、上村くん……そこは！」

上村くんは溢れ出た蜜を指ですくい取って、私のお尻の穴に塗りつけた。そのまま、指を挿れてくる。

「だめ、え……そこは……やああ」

「挿れて欲しいんだろ？ 指なんてケチなこと言わずに、俺のを挿れてやるよ」

「やああつ！」

ジーンズのファスナーを下ろす音。

上村くんの両手が私のお尻を左右に広げ、その中心に固い弾力のある物体が押しつけられる。

「やっ、だめっ！ あつ、ああんっ、あっはああつ！」

窄まるうとする括約筋を押し広げて、上村くんが入ってくる。

ずぶ……ずぶ……。

深く、どこまでも深く。

挿入はスムーズだった。いつも尻尾付きのアナルパイプを挿れられているし、上村くん自身を受け入れるようになってからも、もう二ヶ月以上が経っている。私のお尻は、立派に性器として機能するようになっていた。

大きな上村くんのペニスだが、どんどん奥へと侵入してくる。日本人男性としてはかなり長いものが、根元まで深々と打ち込まれた。

「う……ん、く……うん……や……あ、いやあ」

鈍い痛みと、圧迫感を伴う快感。

一度動きを止めた上村くんが腰を揺すり始める
と、私はさらに崖つぶちへと追いつめられた。

最初の頃は抵抗もあつたお尻でのセックスだが、
最近はずいぶん慣れてきた。お尻でも、ちゃんと
気持ちよくなることはできる。

「だけど、イケないのだ。」

もうちょっとで達しそうなぎりぎりのところま
では感じるのに、まだ、お尻だけでは最後までイ
ケないのだ。同時に前にも刺激を与えてくれれば、
前だけの挿入よりもずっと感じるのだけれど。

もちろん、私の身体を知り尽くしている上村く
んが、そのことを知らないわけがない。ここで私
のお尻を犯しているのは、よりいっそう焦らす意
図によるもの以外のなにものでもない。

自分の指で前に触れようとしても、その度に上
村くんの太い腕に掴まえられてしまう。

「やだっ！ ああっ、ああんっ！ だあ、め……
ダメえっ！」

「気持ちがいい。」

「気が遠くなりそうなほどに、気持ちがいい。」

「なのに、イケない。」

イクためには、あとほんの少し、ほんの少しの
なにかが足りない。

そして上村くんは、そのなにかを決して与えて
くれない。

間合いを取った長いストロークで、腰を強く打
ちつけてくる。ちょうど、パソコンの画面の中の
牡馬と同じタイミングで。

そのせいで、本当に馬に犯されているような気
分になつてしまう。

「ああっ、あうっ……うんっ！ あうんっ！」

「どうだ、リカ。気持ちイイだろ？」

「イ……い……ああっ！ かみっ……むら……っ、
くうんっ！」

「きつと、本物の馬ならもっと気持ちイイぞ」

「や……やあ……ヤダ、あ……ああっ！」

「まずい。」

「もう、本当に。」

「うなずいてしまいそう。」

「なんでもするからイカせてって、おねだりして

しまいそう。

もう、馬でもなんでもいいかなって思ってた。う。

私の中で、悪魔がささやく。

これまでだって、さんざん変態的な行為に身を委ねてきているじゃない。今さら、馬の二頭や二頭なんだっていうの。

うなずいてしまえば、楽になれる。

必死の抵抗を続ける理性の最後のひとかけらは、今にも淡雪のように溶けてなくなってしまうそうだ。

「なあ、リカ？」

「は……だ、めえ……。ダメ……」

涙と涎を垂れ流しながら、なんとか首を左右に振る。

「今日は、ずいぶんしぶといな」

「だって……あうあつ、だってえ……」

いくらなんでも、こればかりは受け入れちゃいけない。

どんなことにも、限界があるものだ。どう見て

も、馬との行為はそれを超えている。精神的にも、そしてなにより物理的にも。

「あ、あんなの……無理……私、ホントに壊れちゃうよ……。そうしたら、もうラッキーとも上村くんとも……できなくなっちゃう……」

「……くそっ」

上村くんは、不意に腰の動きを止めた。私の腰に腕を回して身体を起こさせる。私はお尻を貫かれたまま、上村くんの上に座らされたような格好になった。

「今日のところは許してやるよ」

「……え？」

あまりにも意外な言葉だった。抵抗を続けながらも、私は内心もう諦めていたのだ。これまで、一度やると言った以上はどんなアブノーマルな行為も強要してきたのに。

「あそこで、ラッキーだけじゃなく俺の名前も出したからな。ご褒美だ。ラッキー！」

背後から太腿を掴んで脚を開かせると、上村くんはラッキーを呼んだ。十分その気になっていた

のにお預けを喰らわされていたラッキーは、人間には真似のできない反射速度で私のの上に乗ってき
た。

「あ……あああつ！ あああ つ！」

だらしなく水漏れを起こしていた私のヴァギナに、ラッキーが栓をする。すっぽりと収まったラッキーのペニスが、私の中で大きくなっていく。これこそ、待ち望んでいたものだった。限界まで焦らされていた私は、ラッキーが入ってきた瞬間に絶頂を迎えてしまっていた。

だけでももちろん、ここまで昂ってしまった身体が、一度イッたくらいで満足するはずがない。私は半ば失神しかけた状態のまま、無意識に腰を振っていた。

気持ちがいイ、なんて言葉で表現できる感覚ではなかった。

上村くんのものに深々とお尻を貫かれたまま、ラッキーのペニスに膣を満たされ、瘤が中で大きく膨らんでいく。

固い上村くんのペニスと大きなラッキーの瘤が、

直腸と膣の薄い肉壁を隔てて擦れ合っている。

上村くんだけでも、ラッキーだけでも、小柄な私の中を一杯にするには十分すぎる。なのに前後同時に犯されて、下半身が張り裂けてしまいそうだ。

膣口も、肛門も、一杯にまで拡げられている。小さな身体が悲鳴を上げている。

痛いぐらいの刺激なのに、私は無意識のうちに腰を揺すってしまった。上村くんも私を抱きかかえるようにして、下から突き上げてくる。

初めてだった。

ラッキーと結合した状態で上村くんに口を犯されるのはいつものことだし、アナルバイブを挿れられた状態でラッキーや上村くんとするのも日常茶飯事だ。

だけど、作り物ではない熱い肉棒に前後同時に犯されるのは、初めてだった。

これまで経験したことのない、激しい刺激。全身の神経が過負荷に耐えかねてショートしてしま
いそうなほどの快感。

一突き毎に、私は絶頂を迎えていた。これまで
焦らされていた分を取り返そうとするかのように、
何度も何度もイキ続けた。

立て続けの十数回のエクスタシーの後、ついに
限界に達した私は、ラッキーと上村くんが終わる
のを待たずに気を失ってしまった。

「梨花、心の準備はいいか？」

「……いいわけじゃないじゃない！」

無駄だとわかっていながらも、叫ばずにはいられなかった。

深夜の厩舎に私の声が響く。

そう、厩舎だ。

あの、初めて馬と人間との動画を見せられた日から三ヶ月。

ついに、連れてこられてしまった。

十八歳になって車の免許を取ったばかりの上村くん「ドライブに行こう」と誘われて、着いたところは静内町しずないで牧場を営んでいるという、上村くんの親戚の家だった。

あれ以来、馬の話題を持ち出されることになかった。すっかり忘れていたのだけれど、上村くんは諦めていなかったのだ。

馬に、私を犯させることを。

逃げだそうにも、もう手遅れだった。

私は裸にされて、馬に似せた形に組んだ木枠に、前屈みに縛りつけられていた。ちょうど、本物の馬であればお尻にあたる位置で、腕と脚を木枠にしっかりと固定されている。

この状態で、馬とさせようというのだ。わざわざこんな手の込んだ準備をしたのは、私と馬では身体の大きさが違いすぎるので、まともにのしかかられて怪我をするのを防ぐため。

上村くんもよく考えたものだ。本当に、エッチなことには頭が回るし、労力を惜しまない人だ。

「ねえ、やめてよお……本当に……」

「だーめ。ここまで来て、やらずに済ます手はないだろ。何事も経験だつて」

「こんな経験、したくないよお……や、あぁんっ……」

女の子の部分に、冷たいものが触れる。

ローションを塗った上村くんの手だ。割れ目の周囲に、そして中に、たっぷりと塗りつけていく。「なにしろ馬とするんだからな。滑りをよくして、よくほぐしておかないと」

「それでも無理だつて！ やあんっ、あつ、
やああつ！」

指が入ってくる。

一本……二本……三本。

膾口がいつぱいに拡げられていく。

「なんだ、もう感じてンじゃん？」

上村くんが面白そうに言う。

そりゃあ、感じてしまうのは仕方がない。

上村くんの指で愛撫されて、しかも大量のロー
ションでぐちゃぐちゃにされているのだから。

そしてこの後には、とんでもなく変態的な行為
が待ち受けているのだ。それを思うと、興奮しな
いといえば嘘になる。

だけど、それをしたいかとなると別問題だ。

想像するのは興奮する。しかし、実際にするの
はいろいろと無理があると思う。

興奮した牡馬のいななきに、私はびくつと震え
た。横を見ると、大きな黒い馬が前脚で地面を
引っ掻いている。

その馬の股間からは、信じられないくらいに長

くて大きなものがぶら下がっていた。

まるで野球のバットののような大きさの、馬のペ
ニス。明らかに勃起した状態だ。

馬の種付けをする時には、一種の催淫剤を投与
するという話を聞いたことがある。上村くんのこと
だから、そこまで用意していたのかもしれない。

全身に鳥肌が立った。この巨大な生物からは、
興奮した牡が発する独特のオーラを感じる。それ
は、ラッキーや上村くんから感じるのと同じもの。
つまりこの馬は、私を犯す気満々なのだ。

「重賞で勝ったこともある、なかなかの名馬だぞ。
うんと楽しめよ」

「できるわけ……な、い……いやあ……あんっ、
ああつ」

上村くんの指が、私の中をかき混ぜている。体
温でとろけたローションと私自身の蜜が、溢れ出
て内腿を滴り落ちる。こんな状況下でも感じてし
まう、自分の身体が恨めしい。

「さて、そろそろいいか？」

「やだっ！ やめて、お願い。上村くんのば

かあっ！」

「いい顔だな、梨花の泣いてる顔って、俺、滅茶苦茶そそられる」

「ばかっ！ 変態っ！」

いくら罵声を浴びせたところで、上村くんはこれっぽっちも痛痒を感じていない。期待に満ちた表情で、興奮した牡馬を連れてくる。

荒い鼻息が背中にかかる。体温を感じる。

大きな影が、背後にのしかかってくる。

ギシ……ギシ……。

縛りつけられている木枠が軋んだ。私の身体に馬の体重が直接かかってくるわけではないが、えもいわれぬ圧迫感と重圧を感じる。

「あ……やっ！」

上村くんの手が、私を抜げる。もう一度、ローションをたっぷり流し込んでくる。

そこに、熱い、大きな物体が押しつけられる。

「ひ……い、ああっ……、ん、ぐ……あ」

ぐいぐいと押しつけられて、膣口が広がっていく。無理やり、押し込まれてくる。

すごく、すごく、信じられないくらいに大きい。

広げられていく。上村くんやラッキーを受け入れる時よりもずっと大きく、皮膚や粘膜の弾力の限界まで広げられてしまう。

「い……たい……、いいっ……あ、があ……」

痛い。

限界まで広げられ、引つ張られ、裂けてしまいそうなびりびりとした痛みが走る。

ラッキーの瘤を受け入れる時の感覚に、少し似ている。

ただどあれは、限界まで広げられるのは一瞬のことだ。丸い形状の瘤、入口さえ通り抜けてしまえばいくらか楽になる。

だけど、これは違う。

巨大な馬のペニスには、全体がラッキーの瘤に匹敵する太さがあった。

「ひ……いい……、う……ああっ」

ずぶ……。

ついに、先端部が入口を通り抜けた。膣をいっぱいに広げられる痛みが、奥へと進んでくる。そ

る。あのカメラに、私はどんな風に映っているの
だろう。

興奮した牡馬がその巨体を揺すり始めると、そ
んなことを考える余裕もなくなってしまった。

「ひいっ！ ああっ！ がっあああっ！」

ただ受け入れるだけでも苦しい巨大な性器が、
乱暴に膣壁を擦っていく。

裂けてしまう。本当に裂けてしまいそう。

ずうんっ！

ずうんっ！

信じられないくらいに長いストロークで、何度
も何度も打ちつけてくる。

膣を突き破られてしまいそうな勢いだった。

痛くて。

苦しくて。

身体の中から内臓を突き上げられる感覚に、吐
き気が込み上げてくる。だらしなく開かれた口か
ら、胃液の混じった涎が滴り落ちる。

「やあああっ！ あっ、あああっっ！

やあっ……やめっ！ ひいあああっっ！」

ギシッ、ギシッ！

私が縛りつけられている木枠が軋んでいる。

興奮した牡馬が、体重を乗せて身体を揺すって
いる。

ずうんっ、ずうんっ！

巨大な杭が、私に打ち込まれている。

人間の小さな女性器を、巨大な馬のペニスが引
き裂こうとしている。

私の身体を、突き破ろうとしている。

この感覚、あれに似ている。

時代劇で、大勢の兵士が太い丸太を抱えて、敵
の城門を打ち破ろうとしている光景。

私の華奢な身体も、今まさに壊されようとして
いる。

ずうんっ、ずうんっ！

何度も、何度も、打ちつけられる。

馬のペニスは、私の膣の奥行きよりも何倍も何
倍も長い。このまま膣を突き破られて、喉まで達
してしまいそうな気がする。

スプラッタな光景だ。

私の胎内で爆発が起こった。

途切れかけていた意識が、現実引き戻される。すさまじい衝撃だった。

私を犯していた牡馬が射精したのだ。

それは、麻痺しかけていた私の感覚を、一気に呼び覚ますだけの激しさがあった。

人間の射精は量もたかがしれているし、一瞬のことだ。

ラッキーのは人間よりも量が多いけれど、滴るように流れ出るそれは、一気に噴き出す感じはない。

だけど馬の場合は、ペニスのサイズ同様に、射精も桁違いだった。

例えば、水道につないだ太いホースを子宮口まで挿入されて、一気に蛇口を開けられたら、こんな感じではないだろうか。

それは試験管ではなく、コップで量るのが相應しいような量だった。

膣は一ミリの隙間もなく巨大なペニスで塞がれていたから、先端から噴き出した液体は行き場を

失い、一気に子宮へと流れ込んできた。

その衝撃と激痛に、失神しそうになる。

薄れていく意識の中で、私を貫いていた杭が抜け出るのを感じた。下半身に大きな穴が空いたような、奇妙な空虚さを覚えた。

栓を抜かれた膣から噴き出した液体が、びしゃびしゃと水音を立てて落ちる。

少なからぬ血が混じってピンク色に染まった精液が、足下に水溜まりを作っているのをぼんやりと見ながら。

私は今度こそ気を失った。

「……まったく」

とんでもない夢を見た。

馬と、セックスするだなんて。

昨夜はご両親が留守ということ、上村くんの家泊まったのだけれど、それで見た夢があれ。

大きなベッドの真ん中、上村ちゃんとラッキーの間で目を覚まして、思わず溜息をついた。

シーツの、お尻の下あたりに染みができている。あんな夢で興奮してしまった自分が嫌になる。大きな馬に犯されて、めちゃくちゃにされてしまつて。

なのに感じてしまつたなんて。

あんな夢を見たのも、全部上村くんのせいだ。

昨日、馬と人間とのエッチな動画をさんざん見せられて、その後は明け方近くまで、本当に足腰立たなくなるまでラッキーと上村くんの相手をさせられていたのだから。

既に夜は明けて、カーテンの隙間から白い光が

射し込んでいたけれど、全然眠り足りない。全身が、特に腰がだるくて、とても起き上がれるような状態ではない。

さすがの上村くんも疲れたのか、私の隣で熟睡している。

昨夜はいつたい、何回くらいしたのだろう。私は途中で何度も失神していたので、正確なところはわからない。片手の指では足りないことだけは確かだ。

ラッキーも上村くんも、本当に精力の塊だ。私も彼らとエッチするのは大好きだけれど、体力にはまるで自信がない。精力底なしの二人を相手にするのは大変だった。それに、上村くんが強要するアブノーマルな行為は、精神的な負担も大きい。

「まったく……」

私はもう一度溜息をついた。

「もうちょっと大切にしてよね。君の性癖に付き合える女子高生なんて、希少価値なんだから」

平和そうな上村くんの寝顔が、なんだか癪に障った。枕でもぶつけてやるのか……と考えて、

ふと、もつといいことを思いついた。

エッチの後そのまま眠ってしまつたから、上村くんも私も全裸である。私は髪を縛っていた細いリボンを解いて、上村くんのペニスの根本にしつかりと結びつけた。

いくら精力底なしの上村くんとはいえ、さすがに今は小さく、柔らかくなっている。そこにリボンを結んでおいたらどうなるだろう。

彼の、朝勃ちの時の膨張率はかなりのものだ。それはよく知っている。目を覚ました時、上村くんは孫悟空の苦しみを味わうことになるだろう。

私はいつも、痛いこと、苦しいこと、恥ずかしいことをたくさんされているのだ。たまに、このくらいの仕返しをしても罰は当たるまい。

悪戯の仕込みを終えて寝直そうとしたところで、いつの間にか目を覚ましていたラッキーと目が合った。私は人差し指を唇に当てる。

「しー、これはナイシヨね」

利口なラッキーは、私の企みを理解したのだろうか。悪戯っ子の表情を浮かべて、おとなしくそ

の場に伏せた。

ラッキーに抱きつくようにして、私も横になる。ふわふわのラッキーの毛皮に裸で抱きつく、本当に気持ちがいい。

今度は、ラッキーとエッチする夢を見たらいいな。

そんなことを思いながら、もう一度眠りについた。

だけど。

昨夜のあれは、やっぱりインパクトが強すぎたらしい。

上村くんの悲鳴で目を覚ました時、私は馬のような巨体になったラッキーに貫かれる夢を見て、うなされ、悶えていたのだった。